

フェミニスト神学者メアリ・デイリーが、スイスのフリブール大学にカトリック神学と哲学の学位取得のため留学していた頃、カトリックの世界ではちょうど第2バチカン公会議（1962～1965年）を契機に、近代化と革新が行われている最中であつた。しかしデイリーが聖ピエトロ寺院で目にしたのは、「すべての儀式を執り行う華やかな法衣の枢機卿や司教たちと、まことにつつましやかな黒衣の修道女たちの群れとの余り^(ママ)の対照性」であつた。その現実に胸をつかれたデイリーは、帰国後に教会内の改革を目指して『教会と第二の性』（1968年）を執筆したと言われている。言うまでもなく、この表題はフランスの実存主義哲学者・作家、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの著書『第二の性』（1949年）を意識したものであるが、この『第二の性』もまた実質的にはカトリック批判の書となっている。デイリーはその後まもなく『父なる神を越えて』（1973年）を著し、ポストキリスト教の立場に至り、あまりにも父権主義的なキリスト教に見切りをつけてしまうのだが、この表題にも象徴的に使用されている「父なる神」という神の隠喩の一つについて、隠喩神学（metaphorical theology）の見解を参照してみよう。

隠喩神学からの考察

現代アメリカのエコロジー神学者、サリー・マクフェイグは、自らのエコロジー神学の基盤を、宗教言語の妥当性を問う隠喩神学に置いている。マクフェイグによれば、隠喩神学とは「宗教言語が偶像礼拝と不適切さを克服しつつ、現代において意味を持つようにするための神学」である。隠喩（メタファー）とは、一つのことを何か別のものとして見立てる（seeing one thing as something else）ことであるが、さらにマクフェイグは主要な隠喩を「モデル」と呼ぶ。「父なる神」は父権主義的なキリスト教の伝統における典型的なモデルの一つである。モデルには「…であり、…でない」性質（'is and is not' quality）があり、類似性と非類似性を併せ持つという特徴がある。「父なる神」の場合で言うなら、人間の父が神でないことは当たり前であるから、「神は父ではない」が、他方で神の父性と人間の父性には子どもに対する態度に類似性があるから「神は父である」とも言えるわけである。

「父なる神」に限らず、このような「…である」と「…でない」の緊張関係を保っている内は、隠喩の本来の力が維持される。しかし、ひとたび過重な安定性と展望を獲得すると、それはモデルというよりも概念そのものの位置へと近づいていくことになる。絹川久子は指摘している。「そのような場合メタファーそのものが変質し、神格化が起こり、他のモデルやメタファーを排除してしまうばかりではなく、定義としての資格を得たかのように振る舞う」ことになるという。

歴史的に支配的な神のモデルの中で、上述の隠喩の力の変質化が顕著に見られるのが「父なる神」モデルである。マクフェイグは「君主的な神」モデルと並んで、「父なる神」モデルを極めて一面的なものであるとして批判している。ここでは、「父と子の男性的関係が、三位一体の関係と人間の家族関係に顕著に認められ、女性は階級的に男性に従属的な位置に追いやられてしまう」。デイリーがいみじくも「神が男性なら、男性が神

になる」と表現した事態、つまり「父なる神」という特定の神のイメージの偶像化、男性や父権制の偶像化、女性の経験の周辺化が生じるのである。マクフェイグは、「女性の神のモデルも適切であり、性別にかかわらずすべての人間を恵み深く愛する神によって創造させた世界においては必要でさえある」と強調している。そして代替案として、伝統的な「父、子、聖霊」という神の名前の代りに、「母、愛する人、友」という神の名前を打ち出すのである。

抵抗の信仰姿勢としての「父なる神」

実際に、絹川が指摘するように、ヘブライ語聖書においては、父という言葉が神に用いられることは稀であり、しかもその場合でも父権制的な「父」のあり方とは逆のメッセージを含むものであるという。また山口里子によれば、新約聖書では「父なる神」の隠喩がたしかに多用されているものの、それはイエス自身の神言語の中心ではなく、イエスにおいては女性イメージを多く含む多様な隠喩が活用されていたという。そして「父なる神」の表現は、イエス自身ではなく、むしろ最初期キリスト教共同体の中で重要性を増していくとされる。それはなぜだろうか。わたしたちは言葉が発せられた背景にある歴史的文脈にも注目しなければならない。

山口によれば、新約聖書にみられる「父なる神」表現は、実は「当時のローマ帝国支配・皇帝崇拝に対する、政治的・宗教的な抵抗を示す果敢な信仰姿勢」であつたという。1世紀のローマ帝国では、ジュピター神やゼウス神が「天の父」として崇拝され、皇帝は地上における神の代理者として「父」と呼ばれて神格化され、崇拝されていた。当時ローマの支配下にあつたユダヤ人たちが、イスラエルの神のみを「天の父」として祈ることは、地上の誰をも「父」と呼ばないという、政治的・宗教的な抵抗を示す果敢な信仰姿勢だつたと、山口は解説する。それは「父権制的な支配・従属の人間関係や社会構造に抵抗し、それを根底から覆して、平等で包含的な人間関係や社会を作って行こうとする、信仰共同体の生き方・実践」であつた。今のわたしたちから見れば単に父権制的と片付けられてしまいがちな「父なる神」表現だが、当時はまったく違ったところに意図が置かれていたのである。

天理教には「月日」や「をや（親）」という「かみ（神）」の隠喩があるが、それらが現代という歴史的・社会的文脈において「隠喩の力」をいかに発揮し得るのか、さらなる積極的な検証と展開が教学には求められていると言えよう。

[参考文献]

- 伊藤セツ他編『女性学』同文書院、1992年。
 Sallie McFague, *Metaphorical Theology: Models of God in Religious Language*, 1982.
 Sallie McFague, *Models of God: Theology for an Ecological, Nuclear Age*, 1987.
 宮平望『現代アメリカ神学思想』新教出版社、2004年。
 絹川久子「神の豊かなイメージ／メタファー—ヘブライ語聖書に見る」『日本フェミニスト神学・宣教センター通信』No.4、2000年8月。
 山口里子「聖書に見られる神のメタファーのコンテクストから—新約聖書」同上。